

## 劇場・ホールの移動観覧席の利用実態と活用に関する研究

—移動観覧席が200席以上かつ総客席数が約400席以上の公立文化ホールを対象として—

建築計画—施設計画

正会員 ○千葉絵里子<sup>\*1</sup>  
〃 勝又 英明<sup>\*2</sup>

正会員 堺 皓亮<sup>\*1</sup>

公立文化ホール 移動観覧席 プロセニウム形式  
平床使用 椅子使用 避難所

### 1. 研究目的

移動観覧席は、1つのホールで平床使用、椅子使用を用いて、多目的な活用が可能である。本研究では、移動観覧席が200席以上であり総客席数が約400席以上の中規模以上のホールを対象とした調査により現状の把握と分析を行い、移動観覧席の利用実態と活用について明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究方法

#### 2.1 調査対象

「移動観覧席」を納入しており、総客席数400席以上かつ移動観覧席200席以上のホール221施設を対象に、アンケートを実施した。その結果、136施設(有効回答率62%)から回答を得た。

#### 2.2 調査方法

アンケートは、各劇場のホール管理者に回答してもらう。調査項目は大きく、一般属性・計画時・現在・将来に分類され、移動観覧席の導入理由、意見や評価、今まで行われた演目、稼働率などを聞いた(表1)。なお、このアンケートでの「平床使用」は、移動観覧席を収納した状態、「椅子使用」は、移動観覧席を設置した状態と定義する。

表1 アンケート内容

一般属性	名称、回答者、客席数、貸出費用、床の仕様、パトンの配置、舞台の仕様
計画時	導入提案者、導入理由、導入反対意見の有無、反対理由、災害時における想定
現在	反対していた市民等の意見、管理者側の意見、費用対効果、製品満足度、椅子のグレード感、年間稼働率、椅子・平床使用における演目、平常状態、モード変換、不具合
将来	移動観覧席に求めること
その他	移動観覧席についての意見

### 3. 一般属性について

#### 3.1 納入年

移動観覧席がホールに納入された年を示す。最も古い納入年は、掛川市生涯学習センターの1983年であり、最も新しい納入年は、郡山市立中央公民館と角田市市民センターの2015年であった。1991年から2000年に納入しているホールが多く、約50%であった(図1)。

#### 3.2 舞台形式

舞台と客席の関係から見た形式はプロセニウム形式とオープン形式の2つに分類される。プロセニウム形式とは、舞台となる領域を額縁で区切り、舞台の内側と外側を明確に分ける形式であり、オープン形式は舞台と客席の間に、

額縁構造や舞台幕が存在しないため客席との一体感が保たれる形式である。

舞台形式をプロセニウム形式とオープン形式に分類した結果、プロセニウム形式が79%、オープン形式が17%であった(図2)。

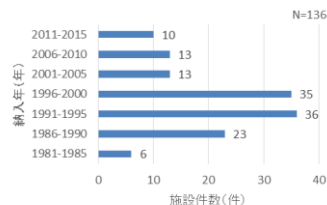


図1 納入年

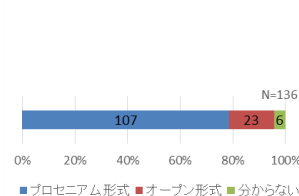


図2 舞台形式

#### 3.3 客席数

本調査は、総客席数400席以上かつ移動観覧席200席以上のホールを対象としている。総客席数には、固定席、移動観覧席、車椅子席、親子席、その他スタッキングチェアなどが含まれる。移動観覧席にはRCS(ロールバックチェアースタンド)とFCP(フォールディングチェアプラットフォーム)が含まれる。RCSとは、階段状に展開できる可動客席であり、壁面などに収納するタイプである。一方FCPとは、椅子を倒して舞台内部に収納する平床タイプである。

総客席数は600席以下が62%であり、総客席数の最大は兵庫県立文化体育館の2474席だった(図3)。移動観覧席数は600席以下が83%であり、移動観覧席数の最大は八日市場ドームの1308席だった(図4)。総客席数全てが移動観覧席のホールは29件であった。

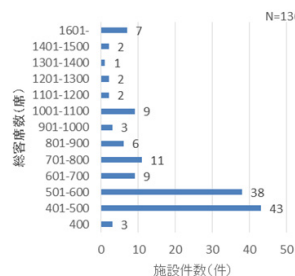


図3 総客席数

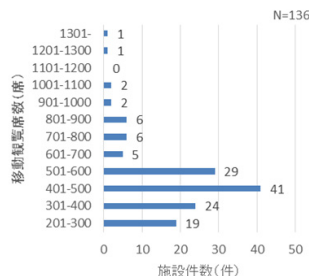


図4 移動観覧席数

総客席数と移動観覧席の関係は、総客席数 1000 席以下、移動観覧席数 800 席以下のものが 81%、総客席数 600 席以下、移動観覧席数 600 席以下のものが 62% であり、移動観覧席は総客席数 1000 席以下の中規模以上のホールに用いられていることが分かる(図 5)。

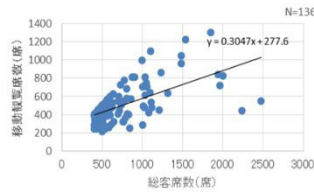


図 5 総客席数と移動観覧席数の関係

害時における避難所・備品の仕分け場としての想定は、「わからない」を除くと、想定していたホールが 65%、想定していなかったホールが 32%であった(図 9)。災害時における避難所・備品の仕分け場として平床が有効であると考えているホールが約 2/3 であった。

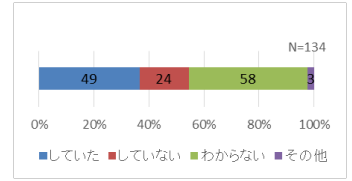


図 9 災害時のホール使用の想定

#### 4. 移動観覧席の計画時について

##### 4.1 移動観覧席導入提案者、導入理由

移動観覧席の導入提案者は、市の担当者が 76%であった。ただし、開館から年月が経っていると必ずしも開館以前のことが分からないと思われるため、「わからない」という回答が多くなり(73 件)、実態として導入提案者については明らかではない(図 6)。

移動観覧席の導入理由は、「多様な演目に使える」、「平床にすることにより可能な演目がある」が多かった。約 90%のホールは「多様な演目に使える」を回答していた。また、30 件のホールは「避難所、災害時の備品の仕分け場など災害時の対応がしやすい」と回答した(図 7)。

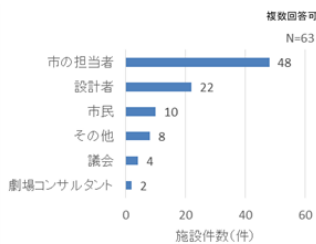


図 6 移動観覧席導入提案者

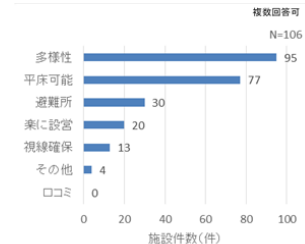


図 7 移動観覧席導入理由

##### 4.2 移動観覧席導入に対する反対意見の有無、反対理由

市民・議会などからの移動観覧席導入に対する反対意見は、「わからない」を除くと、反対意見があったホールが 14%、なかったホールが 81%であった。ただし、開館から年月が経っていると必ずしも開館以前のことが分からないと思われるため、「わからない」が多くなり(96 件)、実態として反対意見の有無については明らかではない(図 8)。なお反対理由は、「客席が揺れる」、「メンテナンス等のコストがかかる」、「客席が貧弱」などがあつた。

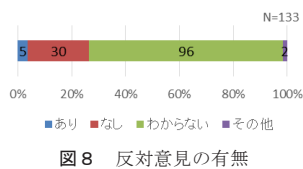


図 8 反対意見の有無

##### 4.3 災害時における避難所・備品の仕分け場としての想定

災害時において避難場所・備品の仕分け場としてホールを使用する場合は、固定客席や段床がある床では不便であるため、平床である必要がある。ここでは、移動観覧席の平床使用の場合に、「災害時における避難所・備品の仕分け場」としての利用を想定していたかどうかを聞いた。災

#### 5. 移動観覧席の現在について

##### 5.1 管理者からの移動観覧席への意見

管理者からの移動観覧席への意見として、長所、短所、苦情の有無、製品満足度を聞いた。

移動観覧席の長所は「多様な演目に使える」が 92%、「平床にすることにより可能な演目がある」が 82%であった(図 10)。移動観覧席の導入理由を「避難所・災害時の備品の仕分け場など、災害時の対応がしやすい」と回答したホールは約 1/4 だったが、長所を「避難所・災害時の備品の仕分け場など、災害時の対応がしやすい」と回答したホールは約 1/2 であり、平床使用時に避難所・災害時の備品の仕分け場など、災害の対応ができることを評価している結果となった。「その他」には、催事の内容により、設定座席を選択できるという回答があり、移動観覧席の中段使用を評価していた。中段使用とは、全ての移動観覧席を展開するのではなく、舞台側の座席の段数を途中まで展開することである。

一方、短所は「メンテナンス等のコストがかかる」が最も多く、「客席が揺れる」、「通路を歩く時うるさい」が続いた。「メンテナンス等のコストがかかる」と回答したホールは 67%であった(図 11)。「その他」には、設営に時間が掛かる、移動観覧席は特殊な製品のため、突発的な故障等に対応できない、などがあつた。

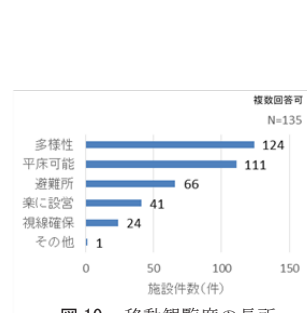


図 10 移動観覧席の長所



図 11 移動観覧席の短所

移動観覧席についての苦情があつたホールは 16%、なかったホールは 75%であった(図 12)。3/4 のホールで苦情がないことから、多くの利用者は移動観覧席に不満がないと思われる。

移動観覧席を満足しているホールは 79%、満足していないホールは 10%であった(図 13)。移動観覧席の短所を「特になし」と回答したホールは 6 件にとどまり、129 件の施設が短所を指摘しているが、長所や苦情の有無など、

総合して製品満足度を検討すると、約 8 割のホールが満足しているという結果が出た。

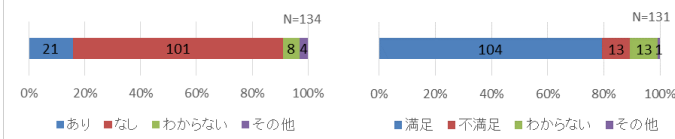


図 12 苦情の有無

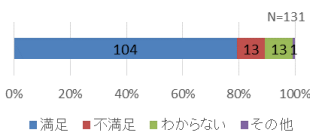


図 13 製品満足度

### 5.2 移動観覧席の費用対効果

移動観覧席の導入費用に対して、導入によって得られる効果があったかを聞いた。移動観覧席の費用対効果があると感じているホールは 72%、ないと感じているホールは 4%であった(図 14)。

### 5.3 椅子のグレード感

移動観覧席の短所には、「客席が揺れる」、「床が揺れる」が挙げられており、椅子のグレード感到弱点があると考えられる。しかし、椅子のグレード感到満足しているホールは 50%、満足していないホールは 31%であった(図 15)。

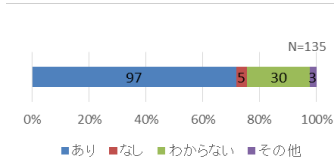


図 14 費用対効果

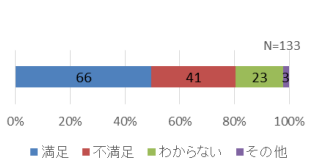


図 15 椅子のグレード感

### 5.4 年間稼働率

年間稼働率とは、年間 365 日から休館日を除いた日数を分母とした利用日数の割合のことである。2014 年度(2014 年 4 月から 2015 年 3 月)の年間稼働率は、81~100%のホールが 13 件と少ないが、他の 0~20%、21~40%、41~60%、61~80%はそれぞれ約 30 件あり、ホールによって稼働率に差があった(図 16)。

利用日数のうち椅子使用の割合を聞いた。椅子使用の割合が 21~40%、41~60%、61~80%のホールを、椅子使用と平床使用の割合がおおよそ同じだとすると、平床使用の割合が 81~100% (椅子使用の割合が 0~20%)のホールが約 40%、椅子使用と平床使用の割合がおおよそ同じホールが約 35%、椅子使用の割合が 81~100% (平床使用の割合が 0~20%)のホールが約 25%であった(図 17)。約 65%のホールは、平床使用と椅子使用のどちらか一方の使用頻度が高いということがわかる。

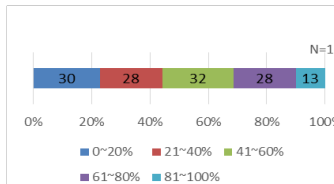


図 16 2014 年度の年間稼働率

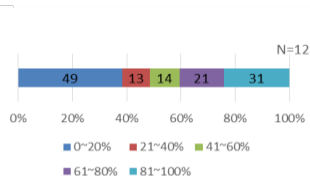


図 17 椅子利用の割合

しかし、移動観覧席の費用対効果があると感じているホールは 72%、ないと感じているホールは 4%であり、約 3/4 のホールは移動観覧席の導入に対して費用対効果があると感じていることから、平床使用と椅子使用のどちらか一

方の使用頻度が高いとしても、もう一方の使用もあり、平床使用と椅子使用の設営ができることを評価していると考えられる。

### 5.5 椅子使用・平床使用で行われた演目

椅子使用と平床使用の利用状態で今までに行われた全ての演目と各ホール 3 つまで回答可能として主な演目を聞いた。

椅子使用で今までに行われた演目は、講演会、ピアノや合唱などのコンサート、演劇、映画、能や落語などの古典芸能が多く、どの演目に関しても半数以上のホールが行ったことがあった。講演会、コンサートは約 90%のホールが行ったことがあり、約 70%のホールがこの 2 つの演目を主な演目として回答していた。一方、今までにあまり行われていない演目は、レセプションパーティー、スポーツ、展示、開票所、避難所であった(図 18、図 19)。「その他」には、研修会、式典、地元の催物などがあつた。

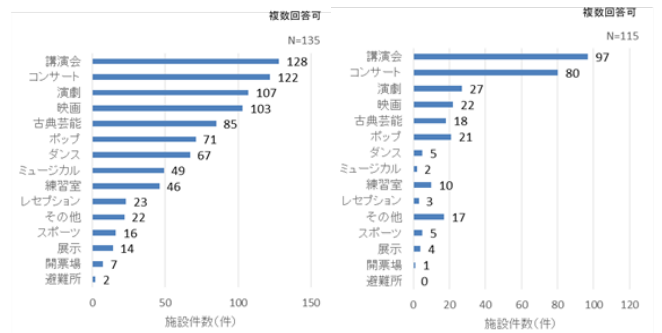


図 18 椅子使用の演目(全て)

図 19 主な椅子使用の演目

平床使用で今までに行われた演目は、展示、レセプションパーティー、ダンスや演劇等の練習室、スポーツが多く、どの演目に関しても半数以上のホールが行ったことがあつた。展示は約 70%のホールが行ったことがあり、約 50%のホールが展示を主な演目として回答していた。一方、平床使用で今までにあまり行われていない演目は、コンサート、演劇、避難所、ポップやジャズ、古典芸能、映画、オペラやミュージカルであった(図 20、図 21)。「その他」には、研修会、式典、会議、健康診断、物販、ワークショップなどがあり、様々な演目が行われていた。

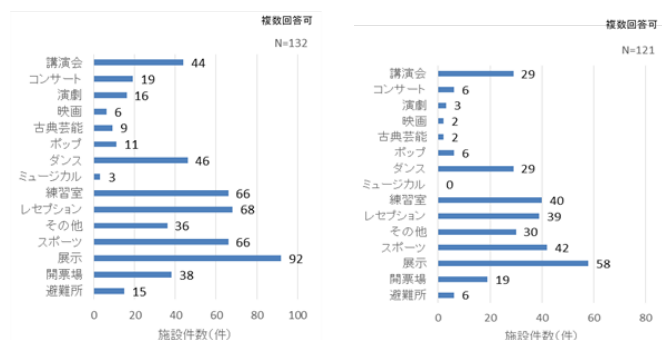


図 20 平床使用の演目(全て)

図 21 主な椅子使用の演目



椅子使用、平床使用の主な演目をみると、講演会は椅子使用と平床使用で行われているが、ピアノや合唱などのコンサート、演劇、映画、古典芸能、ポップやジャズは椅子使用で行われていることが多く、展示、スポーツ、ダンスや演劇などの練習室、レセプションパーティー、バレエなどのダンスは平床使用で行われていることが多かった。

移動観覧席の椅子使用、平床使用によって、演目に適した会場の設営が行われていると思われる。

### 5.6 平床使用時の飲食の許可

平床使用時において飲食を伴うレセプションパーティーを条件付きで許可しているホール、および条件を付けずに許可しているホールは合わせて 61%、許可していないホールは 38%であり、約 2/3 のホールが平床使用時でのレセプションパーティーを想定していた(図 22)。

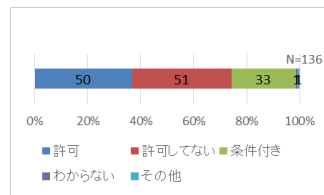


図 22 平床使用時の飲食の許可

### 5.7 移動観覧席の平常状態

ホールで演目が行われていない時、平床使用が平常状態のホールは 39%、椅子使用が平常状態のホールは 33%であった。次の演目の状態にしておくホールは 17%であった(図 23、図 24)。「その他」には、椅子使用だと足元の誘導灯が消えないため平常状態を平床使用にして節電するホールや平常状態を次の演目の状態にしておき、その理由として事前準備を行いトラブル回避する及びその対応をするホールがあった。

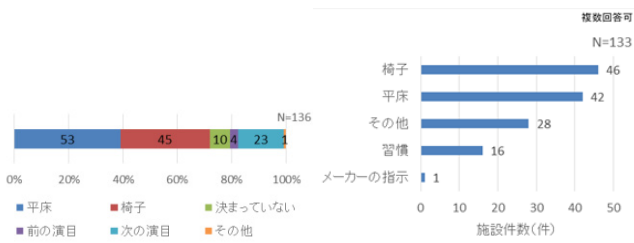


図 23 平常状態

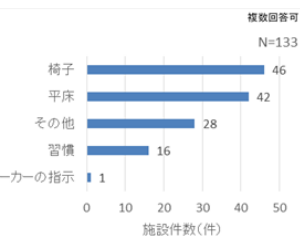


図 24 平常状態の理由

### 5.8 モード変換

モード変換とは、平床使用状態から椅子使用状態にすること、また椅子使用状態から平床使用状態にすることである。なお、このアンケートでの「モード変換」は片道を 1 回と定義する。

モード変換は、年に 1~5 回行うホールが約 10%、月に 1~2 回行うホールが 25%、週に 1~2 回行うホールが最も多く約 40%、週に 3 回以上行うホールが約 10%であり、施設に応じて使用頻度に差があった(図 25)。

「その他」には、年や時期によって頻度が違うホールがあった。

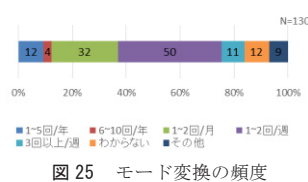


図 25 モード変換の頻度

## 6. 移動観覧席の将来の導入時に求めること

今後、新たに移動観覧席を導入するならば求めること、としては「短時間で簡単に収納・展開できる」、が最も多く、現時点での収納展開の速度に対してさらに短時間で収納展開できることが望まれている。椅子のグレードについては、近年いくつかのホールではほぼ固定席と変わらない品質のものが設置されているが、固定席に比べて椅子のグレード感の落ちるものもあるため、椅子のグレードに対する要望が示されていると思われる(図 26)。

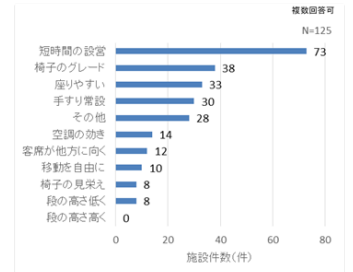


図 26 今後求めること

## 7. まとめ

調査結果より、移動観覧席の利用実態と活用に関して明らかになったことを以下にまとめた(表 2)。

モード変換の調査結果から、移動観覧席は施設に応じて使用頻度に差があることがわかった。しかし、椅子利用と平床利用によって、様々な演目に適した会場の設営を行われ導入理由が果たされていること、約 8 割のホールが移動観覧席を満足していること、約 3/4 のホールが費用対効果はあると感じていることが明らかになった。

表 2 移動観覧席の利用実態と活用

計画時	導入理由	多様な演目が行える	
現在	長所	多様な演目が行える。災害時の対応がしやすい	
	短所	コストがかかる。客席が揺れる。通路を歩くときうるさい	
	苦情の有無	約3/4のホールで苦情がない	
	製品満足度	約8割のホールが満足している	
	費用対効果	約3/4のホールで費用対効果があると感じている	
	利用日数のうち椅子使用の割合	椅子使用の割合が0~20%のホール:約40%、椅子使用と平床使用の割合がおおよそ同じホール:約35%、椅子使用の割合が81~100%のホール:約25%	
	椅子使用・平床使用で行われた演目	主な椅子使用:講演会、ピアノや合唱などのコンサート 主な平床使用:展示、スポーツ、練習室、レセプションパーティー	
	モード変換	年に1~5回行うホール:約10%、月に1~2回行うホール:25%、週に1~2回行うホール:約40%、週に3回以上行うホール:約10%	
	将来	今後求めること	短時間の設営、椅子のグレード感

## 謝辞

調査に協力していただきました、公立文化ホールおよびコトブキシーティング株式会社の皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本調査は東京都市大学建築学科勝又研究室松井優果さん、仁井のはらさんとの共同研究です。

## 参考文献

- 1) 平成 26 年度 全国公立文化施設名簿
- 2) 牧戸奈須加、廣田克彦、幸和紀、勝又英明、田邊健雄: 平土間ホール空間に関するアンケートによる実態調査、日本建築学会関東支部研究報告集、70 号、pp. 317-320、2000. 02
- 3) 勝又英明、西森久和、北村俊也: 舞台機構と上演演目の関係に関する考察、平土間ホールの舞台機構に関する研究、日本建築学会関東支部研究報告集、75 号、pp. 73-76、2005. 02
- 4) 幸和紀、屋田幹也、勝又英明、田邊健雄: 平土間ホールにおける舞台備品の収納状況に関する事例報告、劇場・ホールの収納空間に関する調査研究、日本建築学会大会(東北)学術講演梗概集、2000 号、pp. 397-398、2000. 07
- 5) コトブキシーティング株式会社 ホームページ <http://www.kotobuki-seating.co.jp>

\*1 東京都市大学大学院 修士課程

\*2 東京都市大学工学部建築学科教授・博士(工学)